

## 柳沢 秀敏 先生

先生の突然のご逝去に、多くの方たちが戸惑っておられます。

柳沢さんは私たち家族の主治医でした。そして理想的な主治医でした。

なぜ知り合いになれたのか？ それは偶然のことからです。

それはもう三十年前にさかのぼることです。

夜の七時頃でしょうか。私の家内が、熱か何かがあり、新しく戻ってきた牛込柳町の自宅を出て、なんとなく女子医大方面へふらふらと歩いたそうなのですが、ふと横を見ると「柳沢医院」という場所にまだ電気がついている。

ドアをたたくと先生がおられて、カルテの整理などをしていらつしやったのでしょうか、診察してくださいと、保険証も現金も持たない家内に、「また来た時でいいですよ。」と言ってくださった、のだと聞いておりました。

私も内科の医師ではありますが、私はその時はまだ帰宅していませんでしたのか、留守にしていたのでしょうか。

そんなことから私の家族もいろいろと先生のお世話になるようになりました。私も、ちよつとした診察と処方、予防接種などはもっぱら柳沢先生のところ、先生のお時間のご都合に合わせてうかがっております。私が先生の母校で講演した時のこともご存じだったようでした。

そんなことから、先生も何回か拙宅にこられるようになりました。

昨年のことですが、私が外での夕食会のあと、帰宅した夜九時ごろ、突然のように熱とかゆみ、いわゆるアレルギー症状が全身に出たときの事です。私は抗アレルギーに対するクスリを飲んで一晩様子をみるつもりだったのですが、家内が心配になって先生に電話したところ、先生がすぐにご自宅から往診にきてくださって、適切に対処していただきました。

私のように、主として大学病院で患者さんを診ている者にはない、

社会の前線で「普通の」患者さんを数多く診ている医師の方のほう  
が、社会で頻繁に見られる患者さんたちにより適切に対処できるこ  
とが、実は、実世界の医療では多いのです。

私も柳沢先生の診察を受けるようになると、先生の勉強熱心なこと、  
ジョギングなど、健康にも気を配られていましたが、アルコールも  
好き、話題も豊富、勉強も医学ばかりでなく、クリニクには「ニュ  
ートン」という雑誌が置いてあるほど科学への興味が広い方なので  
す。

特に日本は、世界一の長寿国、しかも最も高齢化の進んだ国となっ  
ています。これから世界では高齢者がますます増えていく時代、長  
寿は誇るべき人類の成果、そして日本の成果です。

この対策をどうするのか。これは、特に今年のG20国サミットを  
ホストする日本国に世界が注目していることの一つなのです。

現在の多くの経済先進国では、一人の患者さんがいくつもの「病気」  
を抱えていることが多いのです。だからこそ、これからの日本の医  
療の中では、専門医を増やすことよりは、私たち一人一人が「主治  
医、かかりつけ医」としての柳沢先生のような、家庭、家族のお医者  
さんを持っていることがますます必要になってきます。

先生が新しいクリニクへ移られ、いよいよこれからという時の突  
然の訃報は、皆さんばかりでなく、私たちにとっても本当に、本当  
に、思いもかけない悲しい出来事でした。

でも、「英敏（ヒデトシ）先生」の甥御さんの「如樹（ナオキ）先生」  
が、このクリニクを引き継いでくれた。こんなうれしいことは  
ありません。

「ナオキさん」のお父上は、私と同じように長い間、米国ではハー  
バード大学で研究、教育に活動され、私は医師でしたが、私とは違  
った学問分野ですが、同じ頃、数年にわたって東京大学での活躍の  
場をえておりました。お互いに、東大ではどちらかといえば「超長  
い米の半分アメリカ人的『変人教授』」として認識されていたと思  
いますが、そんなこともあって「ナオキさん」のことを知る機会が  
できたのです。

でも、まったく予想もしなかったことは、この「ナオキ新院長」が、

「お医者様ではない」お父様とは全く違った「医師」というキャリアを選んだのは、実は「ナオキさん」の「オジサン」、つまり、ここにお集まりの皆さんがよくご存じの、このクリニックの院長だった「柳沢先生」、つまり「ヒデトシ・オジサン」に子供の頃からあこがれて医師になることを目指した若者こそが、この「ナオキさん」だったのだ、ということだったのです。

このことはつい最近、ここにおられる、喪主の「ナオキさん」の「御父様」とお会いした機会に知ったことなのです。

このことを知ったときに、私は何かの「感動」を受けました。それは、「皆さんがご存知の柳沢先生、ヒデトシさん」の、いつも私が感じていたあの真面目で、「医師として」のとてもすぐれたお人柄、その本質が見えたように感じたのです。

柳沢さん、ヒデトシさん、まだまだ医師として、すてきな活躍を楽しみにしていたのに、あなたを突然に失って、私も、私たちも、何と申し上げればよいのか、私たちが先生から頂けたことへの感謝と、お礼の気持ちを著わす適切な言葉はなかなか見つかりません。

ただ、この医院を引き継いだ「ナオキさん」は、「柳沢家」のヒデトシ・オジサン」にあこがれて医師になった人、こんな素敵な後継者が、まったくの想定外のこととして、今までの医師としての素晴らしいキャリアを離れて、あなたの後継者になってくれた。

こんな運命的ともいえる「引継ぎ」を、このように可能にしたのは、ひとえにみんなの愛する「ほんとう」のお医者さん「柳沢ヒデトシさん」、あなたのおかげ、あなたのお人柄、そしてあなたの「医師としての一番大事な『こころ』」だったのだ、と思わずにはいられません。こんなことは、医師であれば誰でも想像を超えらるてもうれしいことだろう、と、思います。

柳沢先生、あなたのあとは「ナオキさん」です。このクリニックはまったく心配のない様子になっていくでしょう。私たちも応援、支援をしていくことをお約束します。

柳沢先生、どうか、安らかにお休みください。

二〇一九年九月二九日

黒川 清